

水稻のイネツトムシ(イチモンジセセリ)の発生時期と防除

古川農業試験場

1 取り上げた理由

イネツトムシ(イチモンジセセリ)は、葉の食害等により収量及び品質低下をもたらす水稻の害虫である。防除適期は第2世代若齢幼虫発生盛期であり、その期間は短期間に限られることから、青色粘着トラップを用いた成虫のモニタリングに基づいて防除適期を予測する方法を普及に移す技術第80号で示した。その後の調査により、本県における第2世代若齢幼虫発生盛期をおおむね把握するとともに、効果の高い殺虫剤を明らかにしたので、参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 第2世代若齢幼虫発生盛期が確認される時期は、おおむね7月下旬から8月上旬である(図1)。
- 2) 第2世代中齢幼虫が主体となる条件下では、DEP水和剤(商品名:ディプレックス乳剤)は殺虫効果がほとんど得られない。テブフェノジド水和剤(商品名:ロムダンゾル)、カルタップ水溶剤(商品名:パダンSG水溶剤)は高い殺虫効果が得られる。(図2, 3)。
- 3) 殺虫効果が高い上記2剤を使用することで、第2世代中齢幼虫が主体となる時期まで防除が可能となる。その時期はおおむね8月上旬である(図1)。

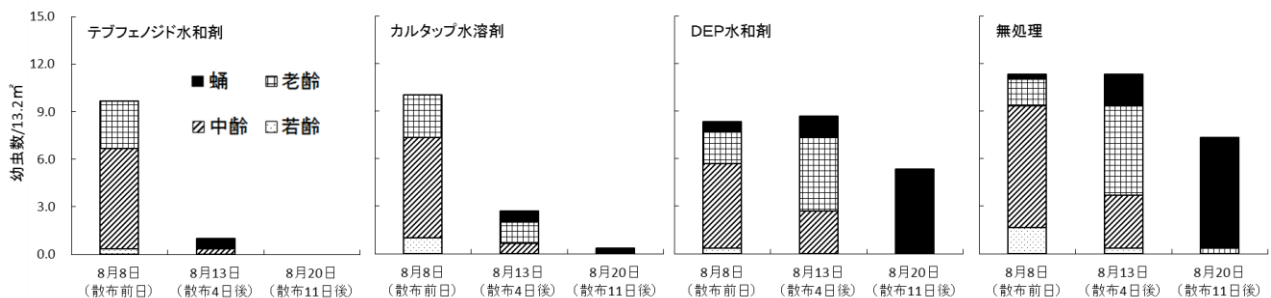


図2 薬剤散布前後のイネツトムシ幼虫数の推移

注1) データは3反復の平均値を示す。

注2) 1~2齢を若齢, 3~4齢を中齢, 5齢を老齢幼虫とした。

3 利活用の留意点

- 1) 第2世代幼虫の発生時期は第1世代成虫のほ場への飛来時期に左右されるため、年次によって変動する可能性がある。そのため本資料で示した第2世代若齢幼虫発生盛期の期間は「ほ場内を見回る時期の目安」として活用することが望ましい。防除時期を的確に把握するためには、ほ場内の定期的な調査、又は青色粘着トラップを用いた第1世代成虫のモニタリング(普及に移す技術第80号参考資料)が必要である。
- 2) 第1世代成虫のほ場への飛来時期は、県北部(古川)と県南部(角田)で数日程度の差(大場ら, 2005)であることから、本資料で示した幼虫の発生時期は県内の広範囲で利用可能と考えられる。

(問い合わせ先: 古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

大規模水田輪作（普通作物）における環境負荷軽減のための主要病害虫制御技術の開発（平成23～24年度）

新品種「げんきまる」における低コスト省力栽培方法の確立（平成24年度）

2) 参考データ

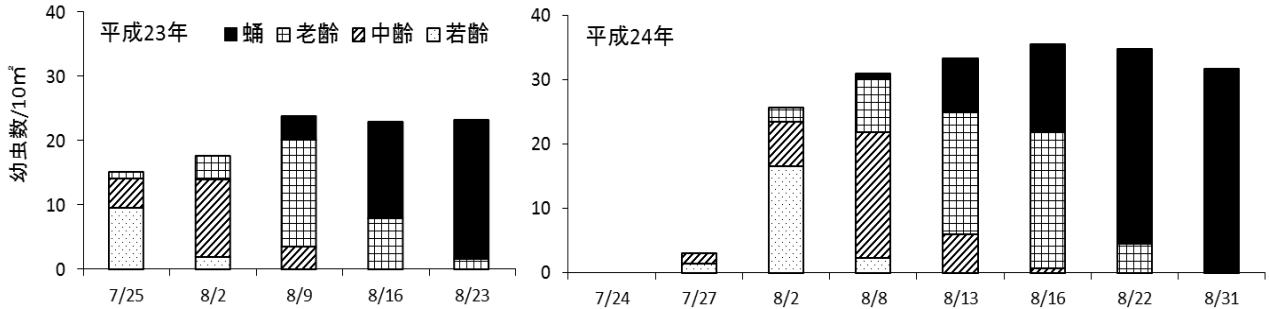


図1 イネツトムシの齢期別幼虫数の推移

注1) 2カ年とも古川農試内ほ場において調査，平成23年は乾田直播栽培で品種はひとめぼれ，出穂期は8月18日，平成24年は湛水直播栽培で品種はひとめぼれ，出穂期は8月23日．平成23年は5.0 m²×3反復，平成24年は13.2 m²×3反復調査し，平均値を10 m²あたりに換算して示している．

注2) 1～2齢を若齢，3～4齢を中齢，5齢を老齢幼虫とした．

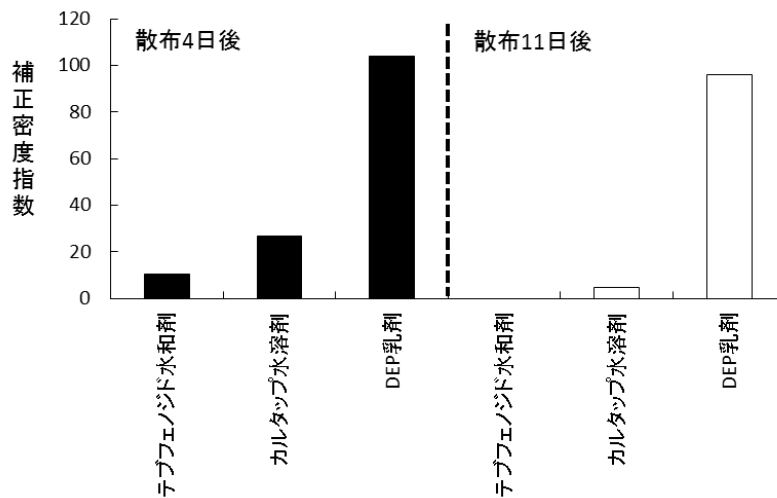


図3 イネツトムシに対する薬剤の効果

注1) 補正密度指数は，散布前の各区の密度を考慮し，各調査時点での無処理区の密度を100とした場合の各区の発生割合を示すものである．補正密度指数=(処理区の散布後虫数×無処理区の散布前虫数)/(処理区の散布前虫数×無処理区の散布後虫数)×100

注2) 補正密度指数は散布直前の蛹数を除いて計算した．

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

イチモンジセセリ成虫のモニタリングに基づく防除適期の把握（第80号参考資料）

4) 共同研究機関

なし